



わが家は森の中

玉木英幸 著 北島新平 絵

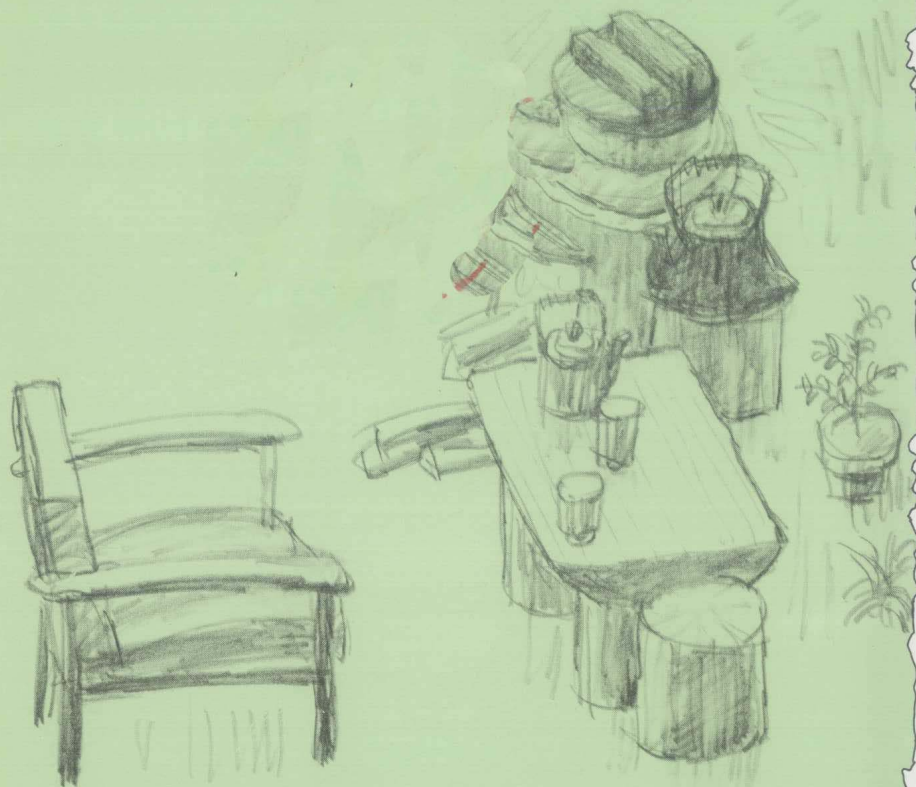
檜原村だより

理論社刊

わが家は森の中

玉木英幸=著 北島新平=絵

理論社刊



玉木英幸

1941年熊本県天草生まれ。千葉県保田海岸で育つ。都立日比谷高校中退。その後アテネフランセに学び、広告会社でコピーライターとなる。職歴多数。1979年家族五人檜原村に移住、標高800メートルの一軒家で自給自足をめざしながら創作活動をしている。著書「東京都檜原村から」「麦の反抗」（三一書房）
住所＝東京都西多摩郡檜原村4977



NDC 914 A 5 変型 20 cm 284 p

1984年初版 8395—32011—8924

著者 玉木英幸（たまき・ひでゆき）

わが家は森の中 1985年六月第九刷発行

制作 小宮山量平 発行 山村光司 発行所 株式会社 理論社

住所 東京都新宿区若松町 15-6 電話 03(203)5791 振替口座東京 9-95736

© 1984 Hideyuki Tamaki: Printed in Japan

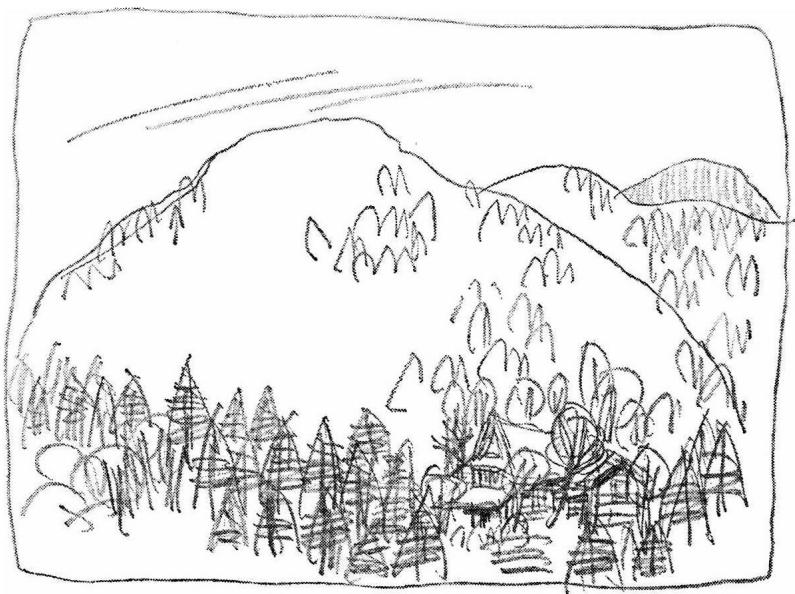
落丁・乱丁本はお取り替えいたします

わが家は森の中



目次

少年と老婆	70
土砂降りロック・コンサート	67
秋祭り	64
玲子の修学旅行	57
親友・新友	49
山の四季	46
・森の四季	37
森の生活	32
畑にいます	25
禅とオートバイ	11
わが子の名前	8
森を抜けて	7



●森のつがやき

山の児童文学者 80

猫は語る…… 87

明鐘岬 111

マムシと蜂 119

デルスー・ウザーラ考 125

中央フリーウェイ 134

ぼくの名前は、とくめいきぼう

ひとりで遠足 141

●森の隣人

浅間嶺にて 150

地蔵の顔 163

がんばれ悪タレ組 168

梅雨と憂うつ 172

動物たち 179

ランプと子供たち 195



あとかぎ	283
麦と丸太小屋	278
ユウさんのように	269
寒い冬	266
ヤコブからの手紙	260
山の散歩	253
マタン・ヤ・ジョイ	236
・森を越えて	227
自治会風景	224
乱魔除け	218
彫刻家の肖像	209
再び・猫は語る	202
捨犬物語	202
・森のうちそと	209



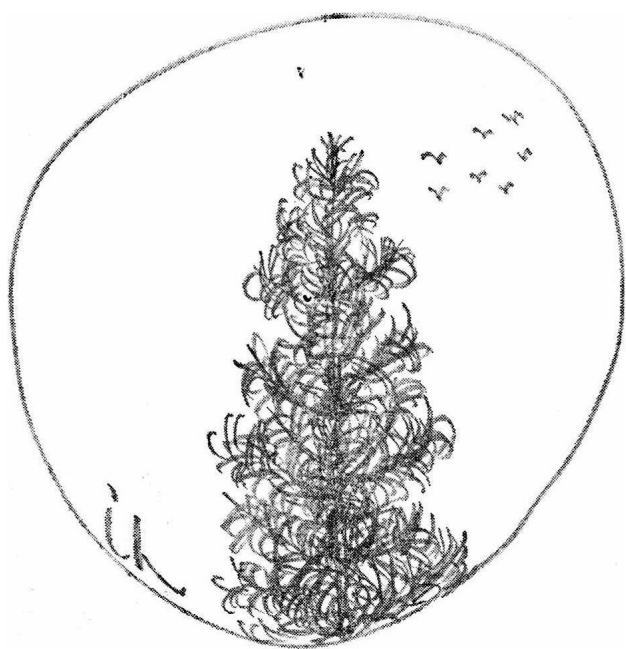
檜原村 ひのはらむら

東京都西多摩郡南西端、多摩川支流の秋川上流域にある山村。面積一〇五平方キロに約千戸、四二一六人が住む。島嶼部を除く東京都唯一の「村」で過疎地。旧名秋留郷、もと神奈川県に属し、一八九三年東京府に編入。村は浅間尾根を境に、北秋川沿いの北谷、南秋川沿いの南谷に分かれ、両秋川が出会う本宿に村役場がある。村内ほとんど森林地帯。かつては林業の他に養蚕と薪炭も盛んだった。林業不振の現在、キノコ、ワサビ、シクラメンなどの栽培も行われる。縄文遺跡が二十数か所。鎌倉・室町期の板碑も多く見られる。武田落人伝説を裏づけるかのように甲州風「かぶと造り」の旧家もある。秩父多摩国立公園に属す。小学校五校、中学校三校。

装幀・さし絵 北島新平

森

へ



森を抜けて

このところ毎日、午後の数時間を、妻と畑に出ている。

山腹の斜面を切りひらいたわずか三百坪ほどの畑だが、家族五人の口をまかなうためにはあり余るほどの収穫がある。夏の土用に蒔いた大根、白菜は順調に育っている。

「よし、今日の夕飯は大根おろしだ」一本引き抜いてみると、思ったよりはるかにまるまると太っていた。人參も親指ほどの太さになっていて、もうひと息だ。季節はずれに種を蒔いたにもかかわらず、キヤベツがちゃんと育ってくれていて、自分たちでも驚いている。

出来たら自慢できるわね。タマちゃんにも、梅さんにも、部落のみんなに分けよう、と妻の昭子が言う。

暗くなる前には、畑から上ってくる。私は風呂焚き、妻はカマドにシバを燃しつけて夕飯の仕度。私



はマキ割りをすませて火を焚きつけ、そのまま庭の椅子に腰かけて、暮れてゆく森に見入る。もう畑の畝の形も定かではない。杉木立はひっそりと鳴りをひそめ、はるかな浅間尾根の上の空だけがかすかに明る。……この瞬間が私は好きだ。まもなく、深い森の奥から、子供たちの声が響いてくるはずだ、山道を抜けて、玲子と理風が学校から帰ってくるはずだ……

ご飯炊けたわよ、あとは味噌汁……子供たちが帰るまで待ちましょ、と言って昭子が庭に出てきた。一杯欲しいんでしょと、ノビルのヌタと焼酎の入ったグラスを持ってきた。グラスはふたつである。

私のテーブルの上には去年次男の理風が作ってくれた空罐のペン立てが置いてある。「お父さん、ありがとう。がんばってください」という理風のメッセージがはりつけてある。父の日のプレゼントに、クラスの者全員が、それぞれ父親のために工作をした。理風はペン立てを作ってきた。小学校四年生の工作としては、まあまあの出来具合、と思われた。深夜、私はそのペン立てを眺めながら、理風の言葉の反対側に、いくつかの言葉を書いてはりつけた。それが今でも残っている。風の遺伝子、風とDNA、光の遺伝子（私論・科学と宗教）……などと書いてある。私が書いてみたいと考えていたテーマだったのかもしれない。ペン立てと、理風の「お父さんありがとう」のメッセージは、今でもちゃんと残っているが、私の書きつけた言葉はそのうち、吹けば飛ぶようなイメージとして消えてなくなってしまうそうだ。——風の、遺伝子……

あたりがすっかり闇につつまれるまでの、ほんの短い間、私は子供たちの帰宅を庭で待ちながら、一

杯飲んでゐる。そしてペン立ての言葉についてホロ酔いの頭で考へてゐる。私たちは現在、森の奥の一軒家に家族五人で住んでゐるが、いったい私たちは、どこからやつてきたのか。なぜ、生きてきたのか。そうして、子供たちは、（この貴すぎる贈物は）どうして私と妻に与えられたのか。

.....

森の奥で、白い光がチラチラとまたいた。

隣家のヤザワの畑の近くを通つて、杉林を抜け、だんだんとわが家に近づいてくる。

玲子と理風はお喋りしてゐるのだらう。声が聞こえてゐる、明るい声である。会話の内容はわからない。

まもなく彼らは、「ただいまあ」と家に飛びこんでくる……

森の中を人が近づいてくる気配がすると、待つてゐる間、いつでも私の胸は高鳴る。それが、他人であらうと自分の子供たちであらうと、学校からの帰宅、という、ありふれた日常の行為であらうと、森を抜けて、だれかがこの家に近づいてくると、なぜか心が躍る。それに、今日はもうこんなに遅く暗い……

風に吹かれて、森を抜けて、子供たちが帰ってくる。

さあ、もうすぐだ。

わが子の名前



一九七九年の夏、私たち家族五人は、東京都西多摩郡の檜原村に移住した。村の北谷のどんづまり、山奥の古い大きな農家を借りうけて住んだ。

家賃は月に五千円。しかも畑や山の樹も利用してよいと大家さんの許しが出た。家から山裾の部落までは、細い山道が続いていた。もちろん車などは通らず、荷物は何もかも背負って上らなければならぬ。煙草ひとつ買うにも往復二時間を要する具合で、遠くて不便ということがあったが、その他の条件がすばらしかった。開墾さえすれば、畑はどんどん増える。天然の沢の水はおいしい。燃料のマキは取り放題……静かで、ゆったりした暮らしができそうに思えた。ただし移住に際して、私自身にはこれといった職業のあてはなかったのだ、今から考えれば、たしかに思いきった冒険ではあった。

当時、次男の理風は五歳だった。もちろん、まだ学校には通っていない。みなからは、りぶちゃんと

呼ばれていた。

「りぶちゃんというから、女の子かと思ったら、男の子なのねえ……ウーマン・リブのリブではないかと思っただけだ」

妻は友達にそんなことを言われた。理科の理、雨風の風——理風と書いて理風よ、と彼女は説明していた。へえ……変った名前ね、と返事が返ってきた。

しかし、理風という名前についての、妻のこの説明は正確なものではない。彼女もそのいきさつは心の底で覚えてはいるだろうが、あんまり思い出したくはないかもしれない。そのためには、彼女は理風が生まれたころ——私たちが都会の片隅に住んでいたころ、吉祥寺の二DKのアパート暮らしの日々を思い返さなければならぬからだ。彼女にとってそのアパートが暮らしにくくなった理由はひどく単純だった。南側に大きなビルが建って、日照時間が極端に少なくなり、おむつや蒲団の干し場を求めてひどく彼女は苦勞していたからだ。そして、もうひとつ。都会生活にどうしてもなじめない私自身の性格があった。それゆえの生活の晦澁があった。私は同じ職場に、二年以上勤めたことがなかった。……

理風が生まれたとき、私は彼に、自分自身とまったく同じ名をつけようと考えていた。

私の名は英幸というので、そのとおり、英幸と名づけたかった。そのまま行けば、同姓同名の親子ができるはずであった。酔狂もいいところ、と思われるだろうが、私は真剣にそのことを考えていた。

欧米の場合、Jr.（ジュニア）を最後につけて親の名をそのまま使うこともある。しかし、このような命名の習慣と、私の場合ではその意味するものが、まったく逆であったような気がする。

自分の三人目の子供に、自分とまったく同じ名をつけようと思いたった、あの当時の私の心理にはかなり異常なものがあつたかもしれない。けれどもそのときの心の欲求はとても激しいものだった。

理風誕生の前後、私はすこぶる個人的な直感で、へおれはまもなく死ぬのだと自覚していた。病気のためではない、また外部的な命の危険がさし迫っていたわけでもない。では、あの時のへもうすぐ死ぬのだという感覚は、いったいどこから湧いてきたのだ？

私が都会に住んでいたから、と言える、私が家族持ちの社会人として生きていたから、と言える、私が若いころに学業に挫折したから、と言える、あらゆることが言える——そして、最後には、人間だったから、とさえ言える。

ああ、おれと同じ名前をあの子につけてやろう。妻のために。私はそんな風に思った。それで、こんどの児の名前は、英幸だよ、と私は妻に言った。彼女は私の瞳をのぞきこんだ……

妻は私の真意を理解したのかもしれない。あるいは、しなかったのかもしれない。茫然としていたようだった。

しかし、生きておくれ、という願いをこめるのに、なにも私自身の名を彼につける必要はないことに、のちに気づいた。私自身の心の危機もどうにか去ったようであった。生命というのは英語でライフだね……妻と話し合うようになった。

リヴがリブになり、理風となった。彼が小学校の三年に進むころには、りふうと呼ばれるようになって

た。先生から家に正しい発音は何ですかと問い合わせがあり、私が、ふう、です、と答えたからである。

あの日、武蔵野日赤から、家まで帰るためのタクシー代がなくて、私は妻の肩を抱いて歩いて帰った。おしめと肌着の区別がなかった私は、同じ種類の肌着ばかり何枚も病院へ運んだ……

商店街の光に照らされながら、疾駆する車の脇を、妻とノロノロと歩いた、あの夜の光景がまざまざとよみがえる。

タクシー代がなかった。だから私は産後の妻を歩かせた。お金を借りる——という手段さえ思いつかないほどの、私はうかつ者だった。そして乳呑児を抱いた妻と歩きながら、自分の「死」を予感していた。

「家にお酒あるの」

妻が私に尋ねた。

「ない」

「私、すこしならお金持つてる。これで買えば……飲みたいんでしょ」

と彼女は私に硬貨を手渡した。私は酒屋でウイスキーの小瓶を買いながら、「この児には、おれの名前をつけよう」と初めて思った。

今から九年前。東京の吉祥寺に住んでいたころの私たちであった。

赤児が産まれると死を思う父親と、病院から歩いて帰る産後の母親と——

私たちの東京生活。

四歳になった理風と妻と三人で、檜原村を訪ねてきた。上の子供二人は学校があるので留守番である。